

## 難民がつくった国「邪馬台国」 4

### 難民がつくった国「邪馬台国」その9—魏志倭人伝を読み直す—

#### 「倭人伝成立の背景」

古代、日本列島に住んでいたと思われる「倭人」という人々についての記述が中国の文献に現れるのは前漢書に「楽浪海中に倭人あり」とあるのが最も古いものです。その他にも山海経、論衡などの書物に倭の記述が見られます。しかし、中国の文献で日本列島の最も古い「国」を記したのは後漢書です。光武帝の時代に倭国王が朝貢し、光武帝から金印を授けられたことが記されています。この時朝貢した国を後漢書は「倭奴国」としています。

後漢書の後の時代について詳しい倭人についての記述があるのは魏志倭人伝です。しかし実は倭人伝は後漢書より先に出来上がった書物なのです。倭人伝は中国の正史「三国志・魏書・烏丸鮮卑東夷伝・倭人条」というのが正しい名前ですが、あまりに長いので通常、魏志倭人伝とか倭人伝とか呼んでいます。魏志倭人伝は西暦3世紀の終わりころに書かれたものです。邪馬台国の卑弥呼が魏に使いを送ったとされる西暦239年のわずか4～50年後です。しかし後漢書はそれよりさらに150年ほど後の西暦5世紀になって書かれたものなのです。したがって、後漢書が「倭奴国」について記したのは倭人伝が「邪馬台国」について記したより後の時代なのです。つまり日本列島にあった国で中国の歴史書に最初に記されたのは「邪馬台国」だといえます。

三国志の著者は西晋の史官、陳寿という人です。陳寿は233年三国の一つ蜀に生まれ、蜀の官職につきましたが、父親の喪中に病気になった時女中を寝室に入れたことが災いし失職してしまいました。その後蜀は滅び、魏から晋の時代になっても、うだつが上がらない状態だったといえます。しかし陳寿の才能を認め引き立ててくれた

人がいました。張華という晋の役人です。張華は名族の出身ではありませんでしたが、晋朝内部の勢力争いの結果権力を握った賈皇后に取り立てられ首席秘書官になった人です。陳寿はこの張華に認められ晋朝の修史官（著作郎）となり「三国志」を書いたのです。その出来栄えが見事だったので張華は「晋書の編集も君に任せよう」といったという逸話が伝わっているほどです。しかし、陳寿の書いた三国志はすぐに正史として認められたわけではありませんでした。陳寿はその後病気で亡くなりましたが、その死後、張華の働き掛けで陳寿の三国志を正史とすることが認められ陳寿の家にあった草稿を役人たちが書写して完成したものでした。

陳寿が三国志を書いた西晋という国は三国時代の後、中国を統一した国でした。そしてこの西晋という国は、魏の重臣司馬懿の子孫が起った国だったのです。司馬懿は魏の将軍でしたが西暦238年、それまで中国東北部から朝鮮半島までの領域を支配していた公孫氏という豪族を滅ぼし、朝鮮半島と倭国を魏の領域としました。その功績によって魏の明帝は遺言で司馬懿に幼い子の齊王の補佐役を命じます。その後、司馬懿は補佐役の地位を利用してクーデターを起こし、魏の実権を握ることに成功するのです。そして、司馬懿の孫の司馬炎が魏の皇帝から帝位を奪い西晋という国を建てたのです。陳寿はこの西晋の史官でした。

邪馬台国は三国志の中の東夷といわれた蛮人について記された東夷伝に登場します。ですからこの東夷伝には倭人の他にも、現在の中国東北部から朝鮮半島にあった国々についても記されているのです。中国の正史には、しばしばこのように中国内部の歴史だけでなく、周辺の諸国についての記録が残されることがあります。中国人は、中華思想といって世界の中心にいるのは自分たちで、それ以外の人々は中国の国王の徳に触れていない蛮人だという観念を持っていました。そして、その蛮人を、住んでいる東西南北の方向によって、次のように呼んでいました。東夷、西戎、南蛮、北狄。つまり東の方に住んでいる蛮人が東夷です。ですから当時の魏の人々にとっては日本列島の人々は東夷だったのです。

実は三国志についてはおかしなことがあります。三国志には東夷伝はあるのですが、北荻伝も南蛮伝も西戎伝も書かれていないのです。もちろん当時中国の東西南北には多くの有力な国があり、魏はそれらの国との交流もしていましたから、三国志を書いた陳寿がそのことを知らなかったはずはありません。しかし陳寿は東夷伝しか書かなかったのです。ここに第一の謎があり、また邪馬台国の謎を解く鍵も隠されています。つまり三国志に「東夷伝」しかなく、「西戎伝」や「南蛮伝」「北荻伝」が書かれなかったのも、司馬懿の功績のあった東夷のことだけを記そうとした意図があったと考えられるからです。実は司馬懿が魏の將軍だった時、ライバルだった將軍曹真が西の大國大月氏国の使者を呼び寄せるといふ大手柄を立てています。ですから三国志に西戎伝を立てその事績を書いてもよったはずですが、陳寿は司馬懿のライバルの功績のあった地域のことは記さなかったのだと考えられます。

著者、陳寿としては時の皇帝の祖父であり、西晋が生まれるきっかけを作った、司馬懿の功績を大々的に持ち上げるように三国志を書いたのだと思われます。そのような司馬懿の功績を最大限顕彰するために「東夷伝」だけが記され、中でも倭人伝がどのように詳しく記されたと考えられます。司馬懿の功績を持ち上げる内容であったことが陳寿の三国志が正史とされた理由かもしれません。

### 「邪馬台国成立前の日本列島」

倭人伝によると邪馬台国が成立する前については次のように記されています。

「その国本また男子を以って王となし、<sup>とど</sup>住まること七、八十年、倭国乱れ、相攻伐すること歴年、すなわち共に一女子を立てて王となす。名づけて卑弥呼という。」

ここでいう「その国」は倭国をさしていると考えていいでしょう。倭国は男の王がいたのです。「住まること七、八十年」とは男の王が治めていた期間が七、八十年だったということでしょう。

続いて倭国内に争乱があったことが記されています。この争乱の時期が何時かというところが問題です。ところで倭人伝が記した時期は当然三国時代の出来事です。しかし、それより前の時代後漢の時代のことを印したはずの後漢書に同じく倭国の乱についての記述があるのです。それどころか、卑弥呼についての記述もあるのです。

「桓、靈の間、倭国大いに乱れ更に相攻伐し年歴るも主無し。一女子有り名を卑弥呼と曰い年長ずるも嫁せず。鬼神の道に事えてよく妖を以って衆を惑わす。是に於いて共に立てて王となす」

先に述べました通り後漢書は三国志より後の時代に書かれたものです。上に挙げた倭人伝と後漢書の記述を比べると明らかに後漢書は倭人伝を参照しているように見えます。しかしところどころ違うところがあり、意味が変わっています。まず「桓靈間倭国大乱」という記述です。これは「後漢の桓帝と靈帝の時代に倭国に大乱があった」という意味です。後漢の桓帝と靈帝の在位期間は西暦146年から189年までです。この時期は後漢自身が乱れて周辺民族の侵攻をたびたび受けた時代でした。後漢書にはその後に「更相攻伐歴年無主」とあります。「無主」文は倭人伝にはないので後漢書の著者范曄が付け加えたものです。

一方、三国志では倭国乱はいつ起きたのかは記されておらず、乱は歴年続きその後には卑弥呼が共立されたとしてあるのに対し、後漢書では倭国の大乱は桓帝、靈帝の治世の時代であってしばらく王のいない時代が続き、その後で卑弥呼が共立されたとしているのです。しかも後漢書に卑弥呼について書かれているということは卑弥呼を後漢時代の人間だとみていることを意味します。現在多くの研究者は後漢書の記述を取り倭国乱は桓帝、靈帝の治世であったとし、しばらく王がいなかったが卑弥呼が共立されたと考えているようです。すなわち2世紀の終わりに倭国乱があったと理解し、卑弥呼の共立も後漢の治世の時代だったと考えているということです。しかし、三国志と違う記述の後漢書をそのまま信じていいのでしょうか。

邪馬台国研究の第一人者ともいえる安本美典氏の研究によると当時の王の在位年数は平均10年程度であったとされています。安本氏は邪馬台国問題に長年取り組み多大な貢献をされてきた研究者ですが、その成果の中でも古代の天皇の在位年数を統計的に割り出した功績は称賛に値するものと考えます。安本氏は歴代の天皇の在位年数を統計的に処理し、古代における天皇の在位年数は平均10年前後と考えるべきだと結論しました。そしてそう考えることは天照大神が実在したとすれば3世紀の半ば、ちょうど邪馬台国の卑弥呼が活躍していた時代に重なることを発見したのです。これは偉大な発見です。この功績により、日本書紀に記されている古代の天皇や神代の巻の神々が実在した王の投影である可能性が高まったからです。それまでも卑弥呼を日本書紀に登場する神功皇后などに比定する見解はありましたが、天照大神に比定する見解はありませんでした。しかも在位年数の統計的な処理という合理的な方法で出した結論ですからアテスタビリティがある結論であり、古代史の研究にはこの成果を無視してはならないと言えます。

卑弥呼は239年に魏に使いを送り、247～8年頃死んだと考えられています。そこで安本氏の言うように当時の王の在位年数が10年程度だったとすれば卑弥呼が王として共立されたのは魏に使いを送った239年から大きくは遡らない時期だったと考えるのが妥当だということになります。後漢書が記すように後漢の時代に卑弥呼が共立されたとすると西暦189年から247年位までほとんど50年間卑弥呼は王であったということになってしまいます。絶対にありえないこととは言えませんが安本氏の研究成果からすると異常に長い治世だったことになります。

### 「後漢書は三国志を誤読した」

先にも述べたとおり、後漢書という書物は三国志より前の時代のことを書いた歴史書ですが、実は書かれた年代は150年以上も後なのです。後漢書には三国志を参考にして書いたか三国志と同じ資料によって書かれたとみられる箇所があちこちに

り、この「倭国乱」の所も三国志をもとに書かれたとされています。では、なぜ後漢書は倭国乱を「桓靈の間」としたのでしょうか。後漢書を書いた范曄が「住七八十年」を「往七八十年」と読み間違ったか、范曄の持っていた資料が間違っていた可能性があります。「住七八十年」は「七八十年は在位していた」という意味ですが「往七八十年」だと「今から七八十年前に」という意味になるのです。では「住」と「往」の読み違いというようなことが起こりうるのでしょうか。この点に関して貴重な見解を提示してくれた研究者がいます。

書道家で古代史研究家の井上悦文氏はその著「草書体で解く邪馬台国の謎」で次のように記しています。

「三国志は、西暦285年に成立したものが中国正史の一つになったと思いがちです。しかし実際はそうではなく、陳寿の没後に皇帝の詔によって陳寿の自宅で筆写されたものが中国正史の一つとして後世に伝えられたものです。(中略)さて、この時に、陳寿の自宅で筆写された『三国志』の本原稿は、陳寿の自宅に残されていた原稿、つまりは陳寿自筆の草稿であると考えられます。そしてこの草稿は、中国書道史の観点から見れば、当時の通行書体で、かつ草稿を書くための書体の『草書体』で書かれていたと思われます。」(井上2013)

井上氏は様々な角度から検証を行い陳寿の草稿が草書体で書かれていた可能性が高く、またそれを書写した役人も草書体で書き写した可能性が高いとされています。と言うことはどういうことでしょうか。実は書道をされる方にはよく知られたことでしょうが草書体の「にんべん」と「ぎょうにんべん」はほとんど区別がつかないので、范曄が参照した三国志がどのような資料だったかは分かりませんがもし草書体で書かれた資料を参照していたとすれば「住」と「往」を読み違った可能性があるのです。原文は次の通りです。

「其國本亦以男子為王住七八十年倭国乱相攻伐歷年乃共立一女子為王名曰卑弥呼」

その国本また男子を持って王となす。留まること七八十年。倭国乱れ相攻伐すること歴年すなわち共に一女子を立て王となす。名を卑弥呼という。

もし范曄が「住七八十年」を「往七八十年」と呼んだとしたら、「住ること七八十年」という意味の原文は「七八十年前」の意味になり「七八十年前に倭国乱があった」という文に変わってしまいます。そうすれば卑弥呼が魏に使いを送った239年から7～80年前は西暦159～169年頃ですから、まさしく「桓霊の間」になるのです。つまり范曄が持っていた三国志の資料が草書体で書かれていたものであったとすれば范曄が倭国乱は桓霊の間にあったと読んだのも不思議ではないということになります。

後漢書はこう書いています。「桓帝と霊帝の間に倭国は大いに乱れ、かわるがわるたがいに攻伐し、暦年、主がいなかった」このように、魏志倭人伝には記述のない「歴年無主」という記述が挿入されています。倭国乱を7～80年前と読んだ范曄はその後の王はどうなったかを、このように考えたのです。つまり、卑弥呼が共立されたのは後のことだとは分かっていたので、卑弥呼が共立されるまでは「無主」だったとわざわざ書き加えたのです。そして「住すること七、八十年」という記述はなくなります。それは「桓霊の間」と書いたことで説明が終わっていると思ったからです。また「倭国乱」によって、長年、王が不在になったということで、「大乱」と、魏志倭人伝にはない「大」の字を足したのだと思われます。

### 「倭国乱はどの範囲の戦争か」

「相攻伐すること歴年」とはどういう状況をさしているのでしょうか。「相攻伐」とは互いに攻め合ったという意味です。

この争乱についてはいろいろな見方があります。特に高地性集落と関係づけて高地性集落が倭国乱の証拠だとする説があります。しかし、高地性集落は、先にも説明し

ました通り、北部九州の弥生人が瀬戸内海周辺の弥生人を一方的に襲撃していたことを示す遺跡で、倭人伝の言う「相攻伐」とは違う争いの証拠です。したがって、高地性集落が倭人伝の言う「倭国乱」の証拠にはならないと思われま

す。もう一つは弥生時代の青銅製の祭器の分布から、銅矛圏と銅鐸圏という相争う二つの勢力圏があったと仮定して、その勢力圏同士の争いが「倭国乱」だとする考え方があります。この考え方も、青銅製の祭器が弥生時代を通じてほとんど九州で作られており、銅矛圏と銅鐸圏は二つの政治勢力だとの根拠が乏しくなったため最近では下火になった意見です。また銅矛圏と銅鐸圏が争っていたとしても、これは高地性集落が銅鐸圏と重なって分布していることから、銅鐸圏が銅矛圏に一方的に襲撃されていたことを示しているにすぎないのかもしれませんが。また、高地性集落の所で述べた通り、この抗争の終焉には瀬戸内海の諸国も近畿の銅鐸文化を持っていた諸国も北部九州の勢力に制圧されたと考えられますので、制圧された勢力が卑弥呼の共立に加わっていたというのも頷けません。

さらに、その後卑弥呼は邪馬台国の南にあった狗奴国と戦ったという記述がありますが、卑弥呼が共立された後、近畿から九州に至る広範囲な地域を支配していたか、少なくとも絶大な影響力を持っていたと考えられる邪馬台国が九州南部の一地域か、近畿の一地域かは置くとしても、邪馬台国の支配領域に比べればほんの地方豪族に過ぎない狗奴国を相手にてこずっていたかのような倭人伝の記述には違和感を覚えます。

このようなことから、いずれにしても、「倭国乱」は瀬戸内や近畿の弥生集落と、北部九州の弥生の国々との戦いというような、広範囲にわたる戦いではないと考えま

す。一方倭国乱は列島西部を制圧した北部九州の国々の争いだとして考古学的にこの考えは成り立つでしょうか。北部九州の弥生集落がほとんど環壕を持ち、一部はそこに城柵を立て土塁を築いていた形跡があること、この時期の甕棺墓から戦死したとみ

られる人骨が発見されていることなどから北部九州の弥生のクニグニの間にも抗争は絶えなかったと考えられます。鉄器が普及し集落間の武力に格差が無い状況では環壕や、城柵、あるいは土塁などの防御施設をそれぞれの国が張り巡らし互いに争っていたものと思われます。このことからやはり倭国乱は北部九州の国々の抗争だったと考えるのが一番自然だと言えるでしょう。この抗争の主役は銅矛を祭器とする集団ですが、その結果共立された卑弥呼の宗教の祭器は銅鏡であるらしいとされています。このことは、銅矛を祭器とする集団間の抗争を収めるために、銅鏡を祭器とする卑弥呼の集団が選ばれたということの意味し、ヒミコの邪馬台国の性格を考える上で興味深いと言えます。

「倭国乱」を考えると、そもそも倭人伝の言う「倭国」の範囲はどこまでなのか。この疑問に答えを出しておかないと議論が拡散してしまいます。そこで、まず、その問題から考えてみましょう。倭人伝には「倭国」「女王国」「邪馬台国」と国の名が3通り出てきます。まず「邪馬台国」と「女王国」の関係ですが、これは対馬国から順に倭人の国々をたどってきて最後に「邪馬台国に至る。女王の都とする所」とあり、また別のところで「女王国より以北はその戸数道里は略載することができる」とありますので、「邪馬台国」とは倭人の国々の一つで、卑弥呼の居城のあったところと考えるのが妥当です。そして、その「邪馬台国」を「女王国」とも呼んでいると考えます。

次に「女王国」と「倭国」との関係ですが、まず、卑弥呼がもらった称号が「親魏倭王」であったとされることから、倭国は「邪馬台国」や「女王国」より広い範囲をさしていると考えていいでしょう。また、「郡の役人が倭国に使いする」という記述があり、これは伊都国に帯方郡の役人が来た時のことを言っていると思われるので「倭国」と記すところは女王国だけではなく女王に統属する伊都国などの国を含んだ呼び方であろうと思います。この考え方に基づけば倭国乱は、後に女王を共立し、女

王に統属することになった国々の間に起きた争乱だったと解するのが妥当だと思います。

また、「倭国乱」という表現を使っています。この「乱」は同じ勢力内の争いを表すという説もあり、この意味からも「倭国乱」は、乱の後に女王を共立し、女王に統属し、倭人伝に名前が記された国々の中の争いと考えた方がよいと思われます。そして、この国々は北部九州にあった弥生の国々だと考えるべきでしょう。また、「相攻伐」という表現が使われていますが、狗奴国との戦いは「相攻撃」という言葉を使っており、表現を変えています。このことから倭国乱は同じ倭国内の戦いであつたと考えるのが妥当でしょう。

最後に「歴年」です。歴は「次々に」という意味や、「数」という意味もありますので「何年か」と訳していいでしょう。つまり倭国乱は数年続いたと考えられます。

こう考えると後漢書の記述に依拠して倭国乱を2世紀の終わりと考えることには疑問が出てきます。「後漢書」の記述にとられることなく「その国、本、また男子を以て王となし、住すること七、八十年、倭国乱れ、相攻伐すること歴年」は「倭国はもともと男子の王がいて、七、八十年おさめていたが、倭国が乱れ、互いに攻め合うことが何年か続いた」と素直に読み倭国乱は卑弥呼の共立のすぐ前だったと読むのが自然でしょう。

### **「卑弥呼の共立とは」**

そのあとに不思議な記述があります。「共に一女子を立てて王となす」です。この記述にはいくつもの疑問がわいてきます。なぜ、戦いをしていた王たちが突然戦いをやめたのでしょうか。なぜ、協力して卑弥呼を王に共立したのでしょうか。しかも、この表現からすると卑弥呼は戦っていた王の中には入っていなかったように見えます。戦いを突然やめた理由を考えるにはこの戦いがなぜ始まったかを考える必要があります。

北部九州の弥生の国々が相攻伐しなければならなくなる原因は、やはり朝鮮半島の情勢の影響だと考えられます。この時期、朝鮮半島には公孫氏が勢力を張っていました。しかし、4代目の公孫淵は魏と呉の間で権謀術数を繰り返して、最終的に魏と戦う羽目になってしまいます。魏の将軍は司馬懿で数万の軍を以って公孫氏に襲いかかりました。当然、朝鮮半島は大混乱に陥り、また敗残兵や難民が大量に日本列島に渡来してきたことと思われます。こうした混乱が北部九州の弥生の国々の中の緊張を高め、相攻伐することになったものと考えられます。すなわち、魏の攻撃により滅亡に瀕した公孫氏の後ろ盾がなくなったため、公孫氏を後ろ盾として、それまで倭国内に威を張っていた王に対し、他の王が反旗を翻して戦乱状態になったのではないかと考えるわけです。しかし、その戦いが突然終わりを告げます。

このような停戦の仕方は倭国の王たちの自発的な動機によるものとは考えられません。そこに強い第三国の働き掛けがあったと思われるのです。それも、普通の国ではありません。よほどの軍事力を持ち、倭国の中の国々ではとても対抗できない国が調停に入ったと思われます。この時期そのような力を持った国は魏しかありません。

魏は西暦238年に公孫淵を滅ぼします。そして帯方郡をその勢力下におくことに成功します。その成功を勝ち取った将軍、司馬懿は、公孫淵亡き後、帯方郡の支配下にあった朝鮮半島諸国と倭国を当然その支配下に入れたはずですが、それなのに、倭国の王たちがまだ争っていたのでは自分の手柄に水を差すことになり、すぐに使いを派遣して倭国王にたちに停戦を迫ったことでしょう。

実は、司馬懿にとって、公孫淵を滅ぼしたことを大々的に首都の洛陽に喧伝することこそが次の大仕事だったのです。この時代、中国の王はその徳によって天からの命令、すなわち天命を与えられることで、天下を支配することができると思われていました。ですから中国の王は、自分が徳のある王だということを、いつもアピールしていなければならなかったのです。そして王の徳を示す最も良い手段は、とにかく遠い国から使者がやってくることでした。それは王の徳が高ければ高いほど、その徳は

遠くまで及び、その徳を慕って遠くの国から使者がやってくると信じられていたからです。

ですから王の部下の将軍は遠くの国を支配下に入れたら、早急にその国の使者を仕立てて首都まで連れて行くことが、王を喜ばせる最大の手段だったのです。そうすれば王は大喜びし、将軍の名声はいやがうえにも上がり、莫大なご褒美ももらえるということでした。この間の事情は中国史の碩学、岡田英弘氏が詳しく述べられています。この間の事情を理解するのに大変重要な説明ですので全文引用します。

「ともかくこの年（二三九年）の正月、司馬懿は曹爽とともに明帝の遺言を受け、八歳の新皇帝を助けることになったのである。そしてその六月、倭の女王の使いが遠路はるばる洛陽に朝貢に来た。これは後漢の安帝の永初元年（一〇七年）以来、絶えて久しくなかった晴れがましい事件である。これというのも、公孫淵を滅ぼした司馬懿のおかげである。司馬懿にとってこれより鼻の高いことはない。もちろんこの倭国の朝貢は、劉夏（帯方太守）が司馬懿のために卑弥呼に働きかけてお膳立てをし、洛陽への世話も焼いたのであった。

その結果いやが上にも司馬懿の面子を立てて、十二月には丁重な詔書が下り、卑弥呼には『親魏倭王』の金印、紫綬とくさぐさの珍宝が送られる。翌年、正始元年（二四〇年）の正月元日の朝礼には、倭使が多く外国使節の首席で参加して、皇帝はわざわざ『これは司馬懿のおかげである』と発言し、司馬懿の封邑を増す。同年、帯方太守弓遵は、部下を倭国に派遣して倭使を送還する。倭の女王は詔書に対する謝恩の手紙を帯方の死者に託す。以上はすべて一連の事件である。二三九年の倭国の朝貢は、司馬懿という政治家にとってはそれほど記念すべき出来事であり、公孫淵討伐の功績を誇示する絶好の機会であり、わざわざそのために仕組まれ演出されたものであったのである。」（岡田 1977）

そういうわけで、司馬懿は公孫淵を滅ぼして手に入れた倭国の使者を早急に洛陽まで連れて行かなければならなかったのです。その倭国が相攻伐していたのでは使者を

仕立てることもできません。司馬懿は倭国乱を早急に収め、新しい倭国王を決めて国書を持った使者をたてるよう画策したと思われます。その使命を実行したのは帯方太守劉夏とその部下だったのです。

ではなぜ卑弥呼が倭国王に選ばれたのでしょうか。倭国内の各国が戦っていたのですから、通常、その中の最も有力な国の王を倭国王としそうなものです。しかし、この時はそれをしませんでした。それは、相争っていたどの王も倭国全体を取りまとめるだけの実力が認められていなかったのでしょうか。では卑弥呼にはその実力があったということでしょうか。

その秘密は倭人伝の次の一文が解き明かしてくれそうです。

「鬼道に事えよく衆を惑わす」

卑弥呼は「鬼道」という宗教の教祖だったようで、その宗教によって人々をひきつけていたというのです。「鬼道」「惑わす」という文字を見ると卑弥呼が何やら怪しげな呪術で人々を惑わしていたように受け取られますが、ここでいう「惑わす」は「魅惑する」という意味の「惑わす」で、悪い意味に使われてはいないと思います。では、「鬼道」とはどのような宗教だったのでしょうか。

三国志には「鬼道」という言葉が倭人伝以外にも使われています。それは魏書の中の「張魯伝」というところです。「張魯遂に漢中により、鬼道を以て民を教え自ら師君と号す」とあるように、張魯という人は三国時代に漢中というところで大きな宗教結社をつくった人です。その宗教結社は「五斗米道」といい、信者にコメを五斗寄進させたことからこの名がついたといわれています。「五斗米道」は中国の民間信仰だった道教を母体とした教えを広めた宗教結社でしたが、「五斗米道」が大きな力を持つにいたったのは、その結社に何十万という人が結集したからでした。三国時代「五斗米道」は漢中で一つの国のような大きな宗教結社となり、周辺の国々と相争うようにまでなっていました。

なぜ五斗米道がそのように多数の人を結集できたかという点、それは、戦乱のため国を追われた人々に食糧を与え、避難所を提供するという慈善事業をしていたからでした。戦乱が多数の難民を生むことは昔も今も変わりません。そのような難民は戦乱を避けて逃げまわったでしょうが、「五斗米道」は「義舎」という避難所を作り、食糧を与えていたのです。そのため何十万という人が張魯のもとに集まり一大宗教結社ができたのです。

三国志を著した陳寿はこの五斗米道の事を「鬼道」といっているのです。しかも、「鬼道」という言葉は五斗米道以外の所では使っていません。五斗米道以外の所で使っているのはただ1か所、卑弥呼の宗教についてだけなのです。「韓伝」に似た記述がありますが「鬼神道」であり「鬼道」ではありません。このことから陳寿は「鬼道」という言葉を怪しげな宗教という意味に使ったのではなく、五斗米道のような道教をもととした宗教という意味に使ったと考えられるのです。つまり、卑弥呼の「鬼道」も怪しげな宗教ではなく、張魯の「五斗米道」のような道教に基づく慈善事業により、戦乱で国を追われた難民を救済する宗教活動だったのではないかと考えられます。人が死ぬと「鬼籍に入る」と言いますが、「鬼」には死んだ人、すなわち祖先の意味があったのではないかと考えられます。張魯の教えも卑弥呼の宗教も先祖崇拝の教えが中心だったのかもしれませんが。その活動が張魯の「鬼道」と同じだと認識で陳寿は卑弥呼の宗教を「鬼道」と呼んだのだと考えられます。そして、倭国乱の最中、卑弥呼のもとには多数の難民が結集し、その宗教結社も巨大化していたのではないのでしょうか。この考えは著名な推理作家の黒岩重吾氏も提唱しています。(黒岩・大和1992)そして、倭国乱を魏の圧力で終結しなければならなくなった時、王たちのだれも、お互いを倭国王と認めなかった事情から、どの王にも加担せず、圧倒的に多数の民衆の支持を得ていた卑弥呼が倭国王に選ばれたのだと考えます。選んだのはもちろん倭国に来た魏の使いだったでしょう。他の王もそれを認めざるを得ないほど、卑弥呼の教

団は勢力を持っていたのでしょう。そして、その時、卑弥呼は邪馬台国といわれた一つの国に居を構えていたのです。

### 「親魏倭王になった卑弥呼」

こうして卑弥呼は倭王となり、国書も魏の使いが準備し、邪馬台国の中から魏まで使いをする難升米と都市牛利が選ばれたのでしょう。この使いが魏の洛陽に到着したのは西暦239年の6月です。

この時期、魏では明帝が病床にあり、幼い子の齊王を位に着けようとしていた時期でした。明帝は司馬懿を齊王の補佐役に任命する遺言を残します。これは司馬懿が公孫氏を滅ぼし、邪馬台国の使いを連れてきた功績に対する褒章でした。そして邪馬台国の使いにもたくさんのお土産が下されました。しかし、最大のお土産は卑弥呼に与えられた「親魏倭王」の金印です。東方の小国に過ぎない邪馬台国に「親魏倭王」の「金印紫綬」という破格の称号が送られたのも、明帝がいかに卑弥呼の使者の朝貢を喜んだかを表していると言えましょう。この金印は卑弥呼を倭国の王として魏が認めたという証であり、邪馬台国にとって倭国の王たちに対するこの上もない力となったものと思われます。

その後、邪馬台国は南にあった狗奴国と戦闘状態に入ったと帯方郡に報告をします。魏は張政という役人を倭国に派遣して詔書と黄幢を、先に魏へ使いに行き、建中校尉に任じられ銀印を授けられた難升米に与えました。この詔書とは魏の齊王の詔ですが、黄幢がどの様なものだったかについては専門家の間でも意見が分かれています。考古学者の奥野正男氏は、長い棒の先に房の付いた毛槍のような、一種の采配だったのではないかとしています。張政は同時に檄文を作って難升米に与えていますので、「邪馬台国の後ろには魏がついているのだから頑張れ」といった意味の使いだったと思われます。

狗奴国との戦いがどう決着がついたかは倭人伝には記録がありません。そして、狗奴国との戦いに張政が檄を授けにやってきた記事の後、卑弥呼が死んだことが記載されています。「卑弥呼以死」です。卑弥呼がなぜ死んだのかについては倭人伝を読む限りではわかりません。いろいろな推理ができますのでいろいろな説があります。中でも興味深い説は安本美典氏の説です。安本氏は天文学から逆算して、紀元247年と、248年に北部九州で皆既日食が続けて現れたことを取り上げ、これが卑弥呼の権威を失墜させ、卑弥呼の死の要因になった可能性があるとしています。卑弥呼が太陽神を祭っていたとの推理から、太陽が消えてしまったのは、卑弥呼の霊力が衰えたためだとされて、殺されたのではないかというのです。安本氏はこの事件が天岩戸伝説を生んだきっかけになったのではないかと推察しています。

奥野正男氏は「以死」を「よって死す」と読んで、張政の檄が卑弥呼の死の原因ではないかと推理しています。(奥野1990) そうだとすると卑弥呼は魏の都合によって倭国王にされ、魏によって殺されたこととなります。

いずれにしても紀元247年か、248年ごろ卑弥呼は死んだようです。「径百余歩」の塚を作って葬ったとされています。百歩は今の長さに換算すると120mになります。そのような大きな墳丘墓を作ったとすれば現代に残っていそうですが、卑弥呼の墓はまだ発見されていません。その後、男の王が起ったようですが、国中が服さず、また戦乱状態になり千人以上が殺されたとされます。これも百人程度なのかもしれません。この記事からすると男の王が起った時には狗奴国との戦闘は終わっていたようです。そこで、卑弥呼の宗女の台与という13歳の少女を王として擁立し、国中が定まったとされています。

このあたりも問題があるところです。卑弥呼の後、起った男の王とはどんな人物だったのかは倭人伝には書いてないのでわかりません。張政が先に詔書、黄幢、檄を与えたのは難升米という人でした。ですから、この人は狗奴国との戦闘の時期には倭国を代表する立場にあった人だったと思われます。しかし、台与が王になり張政が洛陽

に帰るとき、送っていったのは掖邪狗という人でした。ということは、男王とは難升米で、彼が王になった時には国中が服さなかったのが台与が立てられ、彼は失脚したのかもしれませんが。そのため、張政を洛陽まで送っていく役目は次の掖邪狗になったとも考えられます。この掖邪狗らの使いは洛陽まで行き、前回に勝る贈り物を持って行っています。ここまでが倭人伝に記されていることです。

魏は紀元265年に、司馬懿の孫にあたる司馬炎が、皇帝の位を禅譲される形で新しい王朝西晋をたてます。その翌年の紀元266年に倭国が遣使してきたことが記されています。これも、西晋が起ってすぐに倭国王台与は西晋に使いを送ったものと思われれます。すなわち台与たち倭国王は中国の魏王朝とその後継である晋王朝に朝貢し、倭国王として認められることで、倭国内の他の王たちにその権威をふるっていたものと思われれます。その後、倭国が中国に使いを送ったことは中国の資料には現れません。

### 「過大評価されている邪馬台国」

邪馬台国については魏志倭人伝があまりに詳細な記事を残し、その記述が強く我々を引き付けた結果、われわれの邪馬台国のイメージはその実態とかけ離れたものになっている可能性を感じます。我々は邪馬台国を過大評価してはならないと考えます。岡田氏が詳細に説明する魏志倭人伝の成立理由からすれば、倭人伝の記述は司馬懿が征服し恭順させた東方の国々がいかにも大国であったように粉飾したものではないかと思わせます。倭人伝の記述を注意深く読んでいきますと邪馬台国は「城郭」でなく「城柵」に囲まれ、その人々は文身を風俗とし、裸足で生活をしていたと書かれています。衣服も縫製することなく幅のある一枚の布を体に巻きつけたり、穴をうがって首を通す貫頭衣だったりだとされています。また、239年の遣使の持参した貢物は男女生口10人と班布2匹2丈でしかなかったことなどを見ても当時の邪馬台国が体裁の整った大国ではなかったことを表していると思われるのです。

魏志倭人伝を読むと、邪馬台国はいかにも東の大国であるように記されています。特に邪馬台国までの距離と、人口についての数値は誇大であると言われていています。まず人口について考えてみたいと思います。邪馬台国は戸数7万戸と記されています。1戸に何人の人口をあてるかは意見が分かれるところですが、仮に当時の楽浪郡の1戸平均の人口6.5人に対し、少なく見積もって邪馬台国の1戸当たりの人口を5人とすると、邪馬台国だけで35万人もの人口があったこととなります。奴国、投馬国などの大国も入れれば分かっているだけで14万戸余り、70万人近い人口を有する国だったと読めるように記してあります。これは現代の九州の福岡市を除く各県庁所在地の人口よりも多い人口であるということになります。

岡田英弘氏によれば、280年当時の晋の華南部は首都洛陽を含めても11万4千4百戸しかなく、洛陽だけでは10万戸を割っていたといます。さらにそれよりも古い時代、洛陽の人口はもっと少なかったのではないかとの見解です。(岡田1977)

とすれば邪馬台国は当時の魏の都洛陽と同じくらいの人口だったこととなります。これはにわかには信じがたいですし、岡田氏も「おそらく『東夷伝』の倭人の諸国の戸数も、いかに倭国が大国かを当時の中国人に印象づけ、卑弥呼に『親魏倭王』の称号を贈ることを正当化するためのトリックに過ぎまい」(岡田1991)として邪馬台国の戸数7万戸を疑っています。

一方、同じ岡田氏によれば、西暦2年の統計による楽浪郡の戸数、人口は6万2千8百12戸、40万6千7百48人とのことであり(岡田1991)3世紀の北部九州にもともと楽浪郡や帯方郡の住人だった人々が難民化して流入してきたとしても、14万戸、70万人は誇大だと言わざるを得ません。

また後漢書郡国誌によれば楽浪郡の戸数は前漢、後漢を通じて6万2千戸程度で変動していません。三国志東夷伝には扶余8万戸、三韓14,5万戸などの記述があり

ますが、邪馬台国の7万戸を含め東夷伝に掛かれた国々の戸数、人口はやはり誇大であると言わざるを得ないと考えます。

では当時の邪馬台国の人口はどのくらいであったと考えるべきでしょうか。邪馬台国時代の人口については安本美典氏編著「邪馬台国人口論」（安本1991）に各研究者の詳しい考察が載せられています。そこに安本氏が引用した沢田吾一氏の研究による日本国内の人口推定値が載っています。邪馬台国が北部九州か近畿かのどちらかであったとして、その地域の人口を拾うと次の表のようになります。ただし沢田氏の推定値は延長5年（927年）ころの推定値です。

地域		人口
北部九州	筑前	89,150人
	筑後	74,300人
近畿	大和	130,300人
	河内	94,200人

表○延長5年（927年）の人口推定値

この数値は邪馬台国から600年ほど後の人口であり、その間には大きな人口増加があったとする小山修三氏の研究があります。従って邪馬台国時代の人口はこの数値よりかなり少なかったと考えられます。また小山修三氏の推計では弥生時代の人口は九州全体で105,100人、近畿で108,300人であり（小山1984）この数値からしても邪馬台国の人口が35万人というのは信じがたいと言わざるを得ません。むしろ沢田氏や小山氏の推計値が北部九州全域、あるいは九州全域の人口推計であることを考えれば、弥生時代の九州、あるいは近畿の一地域であった邪馬台国の人口は多く見積もっても一桁少ない数値と考えるのが妥当と思われるのです。

### 「誇大な里数」

魏志倭人伝に記載されているもう一つの数値である里数が誇大だということはいまさら言うまでもありません。

では邪馬台国への道筋が、魏志倭人伝にどう書かれているかについてみてみましょう。まず「倭人は帯方郡の東南の大海の中に住み山島に依って国邑をつくる」と書き出して、その後、帯方郡から倭に行く行程が記されます。ここでいう帯方郡とは朝鮮半島にあった魏の東の砦で、現在のソウル付近にあったと考えられています。

「帯方郡から船で出発し海岸に従って巡航し、韓国を歴て、南へ行ったり東へ行ったりしながら、その北岸の狗邪韓国に到るのに7千余里。次に海を1千里わたり対馬国に至る。さらに南に海を1千里わたり壺支国に至る。さらに海を1千里わたり末盧国に至る。東南に5百里行くと伊都国に到る。

東南に1百里で奴国に至る。東に行くと1百里で不弥国に至る。南に行くと水行20日で投馬国に至る。南に行くと邪馬台国に至る。女王が都とする所。水行10日陸行1月」

これが邪馬台国へ行く行程です。この行程記事の中で、途中に出てくる国々の首長を何と呼ぶか、それぞれの国はどういう状況なのかについて記されています。当時の1里は現在の430m程度だということは三国志の本文からわかっています。ですから、これだけの記述があれば邪馬台国へ行くのは簡単なはずですが、残念ながらこの行程記事の通りに地図をたどっても邪馬台国にはたどり着きません。この記事の通りにたどるとフィリピン付近の海上に行ってしまうのです。

つまり、なぜか、倭人伝の1里は三国志本文の1里とは違う長さになっているのです。それは、対馬と壺岐の間を渡海1千里としていることから言えます。対馬と壺岐の間は、対馬のどこから図るかによっても違いますが、一番近いところでは50キロ程度しかありません。1里を430mとすれば1千里は430キロということですから

から全然合いません。これが邪馬台国はどこにあるかの論争のポイントなのです。つまり、魏志倭人伝の里数をどう考えるかということです。

### 「倭人伝の里数をどう考えるか」

従来、これについて三つの意見がありました。一つは倭人伝の里数は全くのでたらめなので、倭人伝の記事から邪馬台国は探せないとする意見です。もう一つは、倭人伝の記述は全くのでたらめではないが、後の世の誤写などによって正しい記事が改変されてしまっていると考ええる意見です。最後は倭人伝の里数はある理由で誇大にされているので、何倍に誇大にされているかを突き止めれば邪馬台国に行けるという考えです。

里数記事が全くでたらめだと考える意見は、邪馬台国を探すのを諦める立場にはなりません。倭人伝の里数記事について根拠を示すことなくでたらめだと決めつけることは、同じ論理で倭人伝のすべての記事を否定することができるのです。それは邪馬台国などという国もでたらめかもしれないし、卑弥呼女王も、架空の女王だったかもしれないということになり、邪馬台国の研究そのものを否定することでしかありません。今、我々の手にしている倭人伝のテキストの記述が実際の地形に合わないとしても、テキストを根拠なく否定するのではなく、なぜテキストにそう書かれたのかについて納得のいく説明を見出すことで、倭人伝という記録が何を記したかったのかを読み取るべきでしょう。

2番目の誤写等によって現存の倭人伝のテキストが正しい記事になっていないとする考え方は、元の記事を復元することができれば邪馬台国に行けることになりませんが、どうも現在残されている倭人伝のテキストのどこに誤写があるのかなどについて、納得のいく説は提示されていません。中国の研究者がいろいろな資料を研究して校訂した、魏志倭人伝評点本という本がありますが、1里の長さについての問題の解決になる答えは出されていません。倭人伝の中に間違いがあるという説の中で、伊都国か

ら南へ行くと記された「南」を「東」の間違いだとした内藤湖南氏の説は有名ですが、なぜそういえるのかの納得のいく説明ができていません。「東」にすれば、邪馬台国が近畿にあったとする説が導きやすいということしか言えません。

3番目の考え方も決定的な説明ができた研究者はいません。しかし、なぜ倭人伝の里数が誇大になったのかについて大変興味深い見解を提示しているのは中国史の硯学岡田英弘氏です。この見解も魏志倭人伝を読み解くときに非常に重要な前提となりますので少し長くなりますが全文を引用します。

「こうした過大な里数を作り出したものは、239年の卑弥呼の『親魏倭王』であった。これはその10年前のクシャン王バースデーバの『親魏大月氏王』との振り合いでできた称号だから、倭国もクシャン国と同様の遠方の大国でなければならなかった。後漢の西城長使班勇の報告では、クシャン(大月氏)の都カーピーシー(藍紫城)は、洛陽から万六千三百七十里となっていた。これに対して、『東夷伝』は、倭の女王の都する邪馬台国は帯方郡から万二千余里としている。一方、楽浪郡は洛陽の東北五千里である。楽浪郡と帯方郡の間の距離は不明だが、帯方郡治の帯方県は帯水(漢江)の河口だから、仮にソウルとすれば、平壤の楽浪郡からでは鉄道で一六二・七マイル、五五〇里となる。これを合計すれば、洛陽から邪馬台国までの距離は一万七、八千里でカーピーシーとの距離はほぼ同じである。」(岡田1977)

ここで岡田氏が大月氏王との振り合いだと言っているのは、司馬懿が魏の末期に権力争いを演じた曹爽の父、曹真が、229年に西方の大国クシャン王朝のバースデーバの朝貢を呼び寄せることに成功し、大いに功績をあげたことを指しているのです。ちょうど10年後に卑弥呼の朝貢は行われており、卑弥呼が「親魏倭王」という破格の称号をもらったのは、司馬懿が邪馬台国をクシャン王国と同様の遠方にある大国だと触込んだためであろうと考えているからです。そして、その司馬懿の子孫が建国した晋朝の下で、陳寿は三国志を著したのです。しかも、不遇であった陳寿を拾った張華という首席秘書官は、一時東北方面の総司令官ともいふべき、「持節都督幽州諸

軍事領護烏桓校尉安北將軍」として北京付近に赴任したことがあり、当時の朝鮮半島諸国の朝貢を成功させた功績を持つ、この方面の地理には詳しいはずの人物でした。当然張華は陳寿の記した邪馬台国の記事には誇張があることを知っていたと思われます。しかし、晋の首席秘書官であった張華にとって、建国の父ともいべき司馬懿の功績を貶めるような史書は作れるわけもなかったでしょうし、作るつもりもなかったでしょう。つまり、彼ら晋朝の官僚にとっては、司馬懿の功績で制圧できた東北諸国が西域の国より貧弱な国であっては困ったことになったのでしょう。ですから、この方面の地理に詳しいはずの張華が、この誇張に異議を唱えないばかりか、その出来栄を褒めて、陳寿に『晋書』の編集も君に任せよう」といったという逸話まで伝わっているのです。(岡田1991)

こういう事情で、朝鮮半島より以南については実際の距離より倭人伝に記された距離が誇大になっているのだというのが岡田氏の考え方です。岡田氏は倭人伝が帯方郡から邪馬台国までの距離を1万2千里としている情報源について明快に「それは司馬懿が演出した二三九年の卑弥呼の使者の朝貢の盛儀の広報がそうになっていたからである。」(岡田1977)と言いつけています。

確かに魏志倭人伝に記された帯方郡から邪馬台国への道のりは実際より誇大になっています。しかし、なぜこの誇大な里数が倭人伝、韓伝にだけ残されたのかについての定説はありません。岡田氏が指摘する「親魏大月氏王」の称号を受けたクシヤン朝との対抗上この誇大理数が記されたとする説は、当時の晋の政治情勢を考えると説得力がある説に思えます。

### 「誇大理数はでたらめな里数か」

岡田氏は上の理由から魏志倭人伝の里数には根拠が無くその里数に基づいて邪馬台国を探そうとするのは徒勞であるとしています。つまり、邪馬台国の場所を探すの

を放棄する立場です。しかし、一方で倭人伝の里数は誇大だからといって、全くでたらめな数値なのかと言うと必ずしもそうとは言えないとする説もあります。

奥野正男氏は、その著で陳寿の地理観に触れて「もし『魏志』倭人伝の里数が、朝鮮半島の記事あたりから実際の里数の四、五倍になっていたとしても、全体の里数が比例的に妥当なものであればこの比定にはなんら支障は生じないであろう。」「狗邪韓国から伊都国までの各国間の里数が、あまり異論のない比定地でもある朝鮮半島南岸、対馬、壱岐、唐津、糸島の間の実数とほぼ一致しているという事実こそ、先ずこの時代の中国人の距離感の繁栄として注目すべきであろう。それが実数の上で四、五倍になっているとしても、陳寿がそれを記載している以上、その事実こそが陳寿の地理観をしめしているものでなくてなんだろうか。」(奥野1990)と述べています。このように倭人伝の里数は実際の里数からすると誇大だが、実際の里数とほぼ比例しており、必ずしもでたらめな里数が記されているのではないとする研究者もいるのです。この考え方は極めて重要です。もし、倭人伝の里数が比例的に正しいとするなら、帯方郡から邪馬台国までの総距離数は1万2千里と記され、また帯方郡から壱岐までの距離は9千余里とされているのですから、残り3千里も意味のある数値ということになるからです。倭人伝の距離が陳寿の距離認識だったとするなら、陳寿は邪馬台国の位置は、壱岐を起点として帯方郡（現在のソウル付近）と壱岐の間の距離の3分の1ほど行ったところにあると認識していたはずだということになるのです。これは安本氏や、奥野氏など多くの研究者の見解と一致し、この考え方を取る限り邪馬台国が九州の範囲を出ることはないという結論は動かないものになるのです。

## 参考文献

- 石原弘道 「魏志倭人伝・後漢書倭伝・宋書倭国伝・隋書倭国伝」  
岩波文庫 1991年
- 岡田英弘 「倭国の時代」 文芸春秋社 1977年
- 岡田英弘 「倭国」 中公新書 1991年
- 奥野正男 「邪馬台国はどこだ」 徳間文庫 1990年
- 小山修三 「縄文時代」 中公新書 1984年
- 安本美典 「『邪馬台国』人口論」 柏書房 1991年
- 黒岩重吾、大和岩雄 「卑弥呼と邪馬台国」 大和書房 1992年
- 井上悦文 「草書体で解く邪馬台国の謎」 梓書院 2013年